

古代山城出土唐居敷から見た鞠智城跡の位置づけ

小澤 佳憲

はじめに

熊本県山鹿市（旧鹿本郡菊鹿町）から菊池市にかけて所在する鞠智城跡は、全周三・五^キ、約五五ヘクタールの範囲を二重の城壁で囲み、内部に倉庫や様々な建物群、貯水施設などを備えた、いわゆる古代山城のひとつとして知られる。築城の記録こそ史書に残されていないものの、その構造から、そしてまた文献上の記録から、鞠智城は六六三年の白村江の戦いの敗戦を契機として亡命百済人技術者の指導により西日本の各地に作られた、いわゆる「朝鮮式山城」のひとつとされ、従って築城の記録が日本書紀に残されたほかの朝鮮式山城―大野城跡・基肆城跡・長門城（六六五年）・金田城跡・屋島城跡・高安城（六六七年）―と同時期に作られたと理解されてきた。

朝鮮式山城と対比されるもうひとつの古代山城の類型として、「神籠石式山城」がある。古く一九世紀末に学会に報告された久留米市高良山神籠石（小林一八九八）をはじめとして、次々と西日本各地でその所在が明らかとなり、現在では北部九州に十、瀬戸内に六城が知られている（第1表）。城壁の基礎外面に石を並べるという特徴を持つこの城郭は、史書に明確な記載がなく、築城の時期も論者によってさまざまで、謎の山城として多くの人々の興味を引いてきた。

第1表 古代山城一覧

所在が不明な 史書記載の 古代山城				瀬戸内型 神籠石式山城		北部九州型神籠石式山城					朝鮮式山城 ^(一)																	
三尾城	稲積城	三野城	常城	茨城	讃岐城山城跡	永納山城跡	播磨城山城跡	大廻小廻山城跡	鬼ノ城跡	石城山神籠石	唐原古代山城跡	御所ヶ谷神籠石	帯限山神籠石	おつぼ山神籠石	女山神籠石	高良山神籠石	杷木神籠石	鹿毛馬神籠石	阿志岐山城跡	雷山神籠石	鞠智城跡	高安城跡	屋島城跡	長門城	金田城跡	基肆城跡	大野城跡	城跡名
近江	筑紫か	筑紫か	備後	備後	讃岐	伊予	備前	備前	備中	長門	豊前	豊前	肥前	肥前	筑後	筑後	筑前	筑前	筑前	筑前	肥後	大和	讃岐	長門	長門	筑紫・肥	筑紫	所在 ^(二)
壬申の乱（六七二）における近江方の拠点として記事	修繕記事（『続日本紀』文武天皇三年（六九九）のみ	修繕記事（『続日本紀』文武天皇三年（六九九）のみ	停廃記事（『続日本紀』養老三年（七一九）のみ	停廃記事（『続日本紀』養老三年（七一九）のみ	香川県坂出市・丸亀市	愛媛県西条市	兵庫県たつの市	岡山県岡山市・赤磐郡瀬戸町	岡山県総社市	山口県光市・熊毛郡田布施町	福岡県築上郡上毛町	福岡県行橋市・京都府みやこ町	佐賀県佐賀市	佐賀県佐賀市	福岡県みやま市	福岡県久留米市	福岡県朝倉市	福岡県飯塚市	福岡県筑紫野市	福岡県糸島市	熊本県山鹿市・菊池市	（推定）奈良県生駒郡平群町・大阪府八尾市	香川県高松市	所在地不明	長崎県対馬市	福岡県筑紫野市・佐賀県三養基郡基山町	福岡県大野城市・太宰府市・糟屋郡宇美町	所在地、その他備考

近年、いくつかの朝鮮式山城において大規模な発掘調査がなされ、また総括的な報告書が刊行されるなどして、個々の城に対する知見

が増加してきた。また神籠石式山城についても、既知の城跡の調査が継続的に行われ、さらに一九九〇年以降になって新たに二つの城跡（唐原山城跡・阿志岐山城跡）が発見されて史跡指定に先立つ発掘調査が行われ、従前よりも調査成果が蓄積されてきている。

これまでの古代山城研究は、大規模な発掘調査事例が少なかったことから、文献や城跡の立地条件、外観など、本格的な発掘調査によらないで得られる情報を駆使して行われることが、どちらかといえば多かった。しかし筆者は、大野城跡の豪雨災害復旧事業に伴う発掘調査を担当し、また鹿毛馬神籠石や阿志岐山城跡の発掘調査に立ち会う機会に恵まれる中で、古代山城の比較研究には発掘調査により得られた築城技術に関する知見を中心に据えることがきわめて有用であると考えようになり、蓄積された豊かな発掘調査成果を元に古代山城の築城技術体系を復元し、各古代山城の歴史的な位置づけを試みる作業を行ってきた（小澤二〇一二など）。本稿でも、こうした視点から鞠智城跡とほかの古代山城の関係を追求したい。

一．鞠智城の築城時期に関する議論

鞠智城の築城時期については、これまでほかの朝鮮式山城とほぼ同時期とされてきたが、その根拠は築城期が史書に記されたほかの朝鮮式山城のように明確ではない。以下、簡単にしておく。

まず、鞠智城に関する文献記録の最も初期のものとして、『続日本紀』文武天皇二年（六九八）に「令大宰府繕治大野。基肄。鞠智三城。」（太宰府に命じて、大野・基肄・鞠智の三城を修理させた。）という記述がある。また、前年には高安城の修築記事もみえることから、鞠智城はともに修繕され、続日本紀に記述された高安城・大

野城・基肄城といった朝鮮式山城と非常に深い関係にあることが容易に推測される。高安城・大野城・基肄城などは、いずれも白村江の戦いにおける敗北を契機として六六五～六六七年に築城されたことが日本書紀に記されており、これらと深い関係が推測される鞠智城についても、これらに極めて近い時期に、同じような築城契機をうけて築城されたと考えられてきた。

たとえば小田富士雄氏は、白村江の敗戦を受けて企画された国防政策の序列としては、まず水城跡（六六四年）、そして大野城・基肄城（六六五年）という大宰府政庁を直接守る諸施設の建設が最優先されたとし、そうした緊張状態が六六五年の唐使の来日と平和外交への転換によりやや好転したことをうけて、国を守る「かたち」として第二次防衛線である金田城・高安城・屋島城などの築城（六六七年）が計画されたと考え、鞠智城もこの第二次防衛線の中で築城された、すなわち六六七年にきわめて近い築城であるとの仮説を示した。

考古学的には、出土遺物からの検討がある。鞠智城跡から出土した瓦について検討した甲元眞之氏は、鞠智城跡出土の軒丸瓦が大野城跡出土瓦よりもやや後出する要素があると指摘し、鞠智城の築城を大野城跡よりもやや遅れた時期から、修築記事のある六九八年までの間とした（甲元二〇〇六）。

鞠智城跡の総括報告書の中で行われた出土土器の検討の中でも、築城時期の手がかりが述べられている。鞠智城が築かれる前に同地には古墳時代集落が広がっており、出土土器は六世紀第三四半期以降のものが連綿とみられるが、七世紀第四四半期にはその量が急増する。この時期の出土土器の大半は須恵器だが、少量見られる土師

器の多くは在地の土師器ではなく近畿と関係する可能性があると考えられる。これらの状況は鞠智城の成立を物語る考古学的な証拠とも考えられるが、前述小田氏の議論とはわずかながらずれがあるようにもみえ、問題が残される（熊本県教委二〇一二）。

近年、築城年代の明らかでない古代山城の一群である神籠石式山城について調査研究が進む中で、出土土器から見ると築城時期が七世紀中葉〜後葉のまさに白村江の戦い前後に当たる可能性が高いことが明らかにされつつある。つまり、築城の時期が明らかで史書記載の朝鮮式山城と、不明な神籠石式山城、そして鞠智城が、相互にきわめて近接した時間軸の中で築城されたことになる。であれば、それらがどのような順番で築城されたのかを検討することは、古代山城群の築城の背景や築城契機などを検討する上で重要であろう。

これまでこの課題を解決しようと多くの先学が労を尽くしてきた。しかし史書における直接的な記載はわずかで、そのわずかな記述を巡ってしばしば、様々な解釈が並立した。そして、出土土器などの断片的な考古資料は、それぞれの論者により異なった評価が与えられ^③、先の見えない論争が続いてきた。古代山城各級の築城の契機と順序については定説に至っていないのが現状である。

筆者は以前、発掘成果に基づき城郭を構成する各構造物の築造工法の差異を検討し、その変化と発展の流れから古代山城各級の築城順序を明らかにしようと試みたことがある（小澤二〇一二）。このときに検討対象としたのは、版築土塁と石塁の築造工法であった。しかし、このときはそれぞれの工法についていくつかのパターンを抽出し、それらを形式的に配列するには至ったものの、どちらのパターンが古くどちらが新しいかという、形式同士の先後関係につ

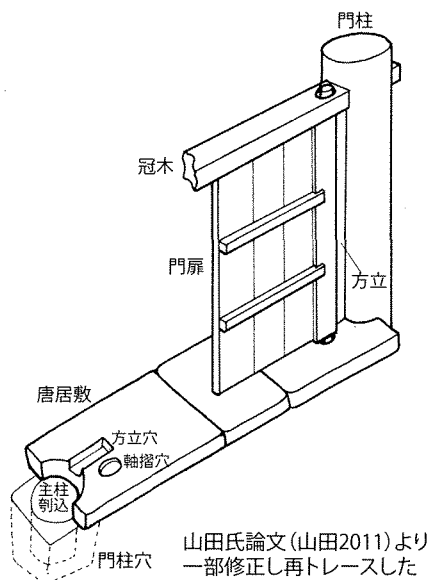
いては最終的な結論を得るまでには至っていないかった。

本稿では、その形式的な先後関係を復元するために、古代山城の城門構造に着目したい。城門からはしばしば、扉の回転軸を固定するため、石製の「唐居敷」と呼ばれる部材が出土している（向井一九九九など）が、それらには様々な形態のものがある。この唐居敷について分類を行い、形式同士の先後関係を検討することで、古代山城各級の先後関係を把握することができると考えられる。鞠智城跡で知られる三つの門跡（深迫門・堀切門・池ノ尾門）においても唐居敷が出土しており、上記の検討を行った上で鞠智城跡の唐居敷の位置づけを行うことにより、鞠智城の歴史的な位置づけについても明らかにされる部分があると期待される。

二、唐居敷とは

まず唐居敷とは何か、その基本的な構造について解説する（第1図）。

城門には必ず扉がつく。通常、二枚の扉板が回転運動により内側に開かれる構造を持つ。その扉の回転運動の基礎部分を固定するのが唐居敷である。ほとんどの場合は軸摺穴と呼ばれる小さな穴が開けられ、この穴を用いて回



第1図 唐居敷の基本構造

転軸の基礎を固定したと考えられる。

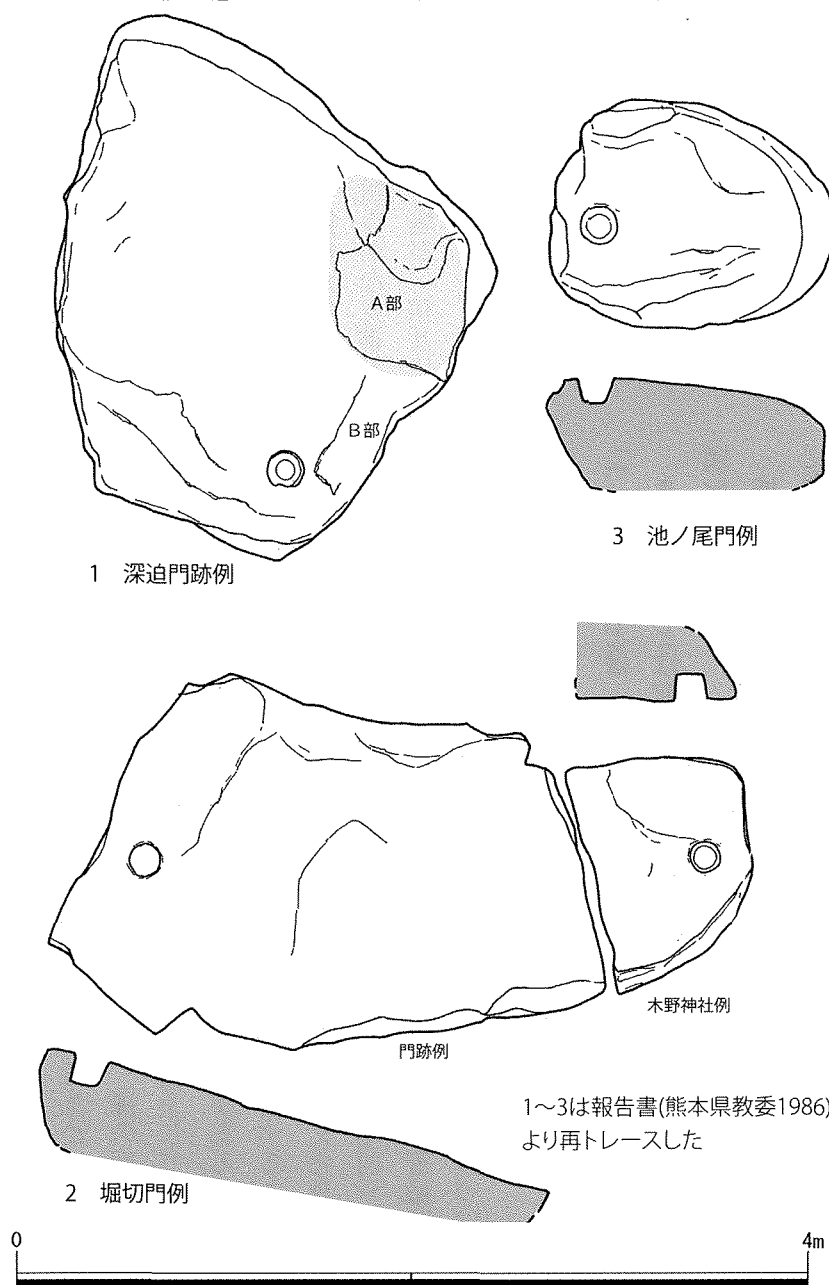
さて、扉の横には門の主柱が配置されるため、唐居敷には主柱を固定するための加工が付加されることが多い。主柱用加工といい、門が掘立柱建物の場合、唐居敷への細工は柱の断面の半分ほどの形の割り抜き加工となる（主柱用刳込）。一方礎石建物の場合には、平坦、凹み、突出台座といったいくつかの加工パターンが見られる。さらに、扉が回転する際にどうしても出来てしまう主柱との間の隙間を隠すため、「方立」という部材を柱の横に取り付ける必要があり、しばしばこの方立を固定するための加工が施される。これを「方立穴」という。

以上の三種類の加工が基本的な石製唐居敷の属性であるが、これらに加えてさらに「蹴放し」と呼ばれる部材を固定するための刳込や、開扉時に扉が限界以上に動かないようにするための段差などが付属する例が知られる。本稿では、上記三つの基本属性をもとに唐居敷の分類を行う。分類に際しては、唐居敷を唐居敷たらしめる最も基本的な属性である軸摺穴の形状に特に注意を払い、唐居敷にいくつかの類型を設定して相互の先後関係を検討することとした。

三、鞠智城跡出土の唐居敷諸例

（一）鞠智城跡出土の唐居敷

最初に鞠智城跡出土の唐居敷について詳しく見ていく。鞠智城跡では城門遺構として深迫門跡・堀切門跡・池ノ尾門跡の三ヶ所が知られ、これらの近傍からそれぞれの門で使用されたとみられる唐居敷が計四例発見されている（第2図）。いずれも原位置からは遊離していて、門の近傍で発見された。これらの城門跡はいずれも城の南側城壁ライン上に位置しており、ほかに北側城壁ライン上で一ヶ



第2図 鞠智城跡出土の唐居敷諸例

所城門の存在が推定されているが、現在その箇所は道路となっていて遺構の有無は不明である。以下、三つの唐居敷について見ていく。

(二) 深迫門例(第2図―1)

深迫門跡出土唐居敷は一边二メートル以上、厚さ五〇センチほどをはかる巨石に、軸摺穴と考えられる円孔が穿たれたものである。深迫門跡の前面で一部が地上に露出していたといい、現在は門跡の前面やや北寄りに簡易な覆屋をかけておいてある。

唐居敷の上面はおおよそ平坦に加工がなされ、図の右辺に沿って最大幅〇・八メートルほどの部分のみが平坦に打ち欠かれず凹凸がある(図A部)。上面をよく観察すると、A部左側に広がる平坦な部分にはかすかに叩打痕が残り、全体に薄い摩耗痕跡が認められることから、この平坦面は意図的に作出され、門通路部の敷石として用いられて摩耗したとみられる。

また、軸摺穴の横(図では右下側)には〇・四×〇・五メートルほどの範囲に丁寧な平坦面を作り出した部分が見られる(図B部)。図A部左側などほかの平坦部よりも、丁寧に凹凸をつぶして平滑にする加工が施しており、軸摺穴の横という位置関係からすると門建物の柱座の可能性がある^(四)。深迫門跡の調査では門建物の柱穴が発見されておらず、唐居敷の石材を礎石として兼用させたものである^(五)。なお、以上の見解が正しければ、この唐居敷に掘り込まれた軸摺穴は城内に向かって右側に配されたものと判断できる。

軸摺穴は上面幅一五・五センチ、底部幅一〇・五センチ、深さ一三・五センチほどの規模を持ち、底部がやや丸味を帯びた円柱状を呈する。最上部には高さ一センチほどの段が掘られ、段部の幅は

一・五×二・五センチほどでややゆがんだ円形を呈する。軸摺穴下半部と段部では造作に違いがあり、段部の加工は荒く当初の計画の中で作られた部分とは異なる感じが見受けられる^(六)。

底面の中央わずかに偏った部分には、直径八センチほどの円形のかすかなくぼみが見られる。断面はわずかに丸みを帯び、内面は摩耗して平滑になっている。底部の周縁部から側壁の最下部にかけては錆色が付着していた。また、側壁は広い範囲で黒色に変色しており、これも鉄錆色の変色した可能性がある。

(三) 堀切門例

堀切門跡から出土した(と考えられる)唐居敷は二つが知られる(第2図―2)。一つは発見時に門跡推定地の上方の西面に立てかけてあったとされるもの(以下、「門跡例」とする)で、一・六×二・五メートルほどの巨石に軸摺穴と考えられる円孔と主柱刳込と考えられる浅い円弧状刳込が施されている。もう一方は門跡の南約一五〇メートルにある木野神社の境内に置かれていたもの(以下、「木野神社例」とする)で、やはり軸摺穴(円孔)とごく浅い円弧状刳込が見られる。両者はもと一つの石材の両端に唐居敷としての加工を施したものであることがわかっており(熊本県教委一九八三)、現在は接合されて城門内側の門跡近傍にて簡易な覆屋の下で展示されている。

唐居敷の石材の上面はほぼ平坦で、深迫門例と同じように全体に荒い叩打痕跡と部分的な摩耗痕跡が認められる。一つの石材に左右の軸摺穴と主柱刳込が掘られていることから、本石材の中央部は門通路部の敷石として機能していたことが明らかであり、残された摩

耗痕跡もこれを支持している。

主柱刳込と軸摺穴の位置関係から、城内に向かって右側に位置していたと考えられるのが門跡例である。軸摺穴は上面幅一六・〇センチ、底部幅一一・五センチ、深さ一四・〇センチほどの規模を持ち、断面形状は深迫門例と同じく底部がやや丸い円柱状を呈する。やはり底部の中央やや偏った部分に直径八センチほどのごくわずかにくぼみが見られ、くぼみ部以外の底面には薄く叩打痕跡が残るのに対し、くぼみ内部は平滑に摩耗している。側壁には、縁から一センチほど下に幅一・二センチほどのやや薄い錆色が帯状に巡り、その下には暗赤褐色の明瞭な錆色が幅二センチほど帯状に付着している。また、中位には錆色の固形物が部分的に付着しており、そこから斜めに円周状の錆色付着が認められる。

主柱刳込は数センチほどときわめて浅い掘り込みであり、石材の上面を水平にした場合、刳込部の側壁は垂直ではないが、側壁には大野城跡出土唐居敷などの主柱刳込側壁に見られるのと同様の大きな単位の叩打痕跡が認められ、明らかに人工的な加工が施されたと判断できる。残された円弧から正円を復元すると直径八五センチとなるが、門跡の発掘調査では直径六〇



第3図 堀切門木野神社例に見られる底部加工痕

センチの柱跡を検出しており、やや大きめに刳り込まれたのである。

一方、城内に向かって左側に位置したと考えられる木野神社例であるが、軸摺穴は上面幅一五・五センチ、底部幅一一・〇センチ、深さ一三・〇センチほどをはかり、断面形状は底部が平坦な逆台形状を呈する。特に壁―底部境が直角に鋭く屈曲する点がほかの例と異なるが、よく観察すると壁―底境に集中して、ほかの箇所に残る加工痕よりも単位が大きく荒い別の打欠加工痕が認められる(第3図)。おそらく、比較的新しい時代に、元は他の例と同様に緩やかに屈曲していた壁―底境に手が加えられ、明瞭に屈曲する現在への形状へと変更されたものである。この新しい加工部分のみ錆色が付着していないこともこの見解を支持する。この加工のためもあり、底部にはほかの例と同じような円形の摩耗痕跡があるかどうかは定かではない。なお、側壁の下部にごく細い錆色が一周し、また底部の中央にも薄い錆色が広く付着しているが、これはおそらく上述の再加工前には側壁下部から底部にかけて広く錆色が付着しており、再加工時に打ち欠き部分のみ錆が失われたものである。主柱刳込は門跡例とほぼ同様であり、復元された正円は九五センチとされる。

(四) 池ノ尾門例

池ノ尾門跡の唐居敷は一辺約一・五×一・一メートルほどと他例に比してやや小型の石材に円孔を穿ったものである(第2図―3)。推定門跡の城内側に簡易な覆屋をかけておいてある。

唐居敷の上面はほぼ平坦で、調整・摩耗痕跡ともに不明瞭である。

また、本石材は他の唐居敷と比べてかなり小さく、他の例のように門の中での位置関係を推定することは困難である。

軸摺穴は石材の偏った位置にあり、上面幅一六・〇センチ、底部幅一一・〇センチ、深さ一三・五センチほどの規模を持ち、底部がやや丸みを帯びた円柱状を呈する。底面のほぼ中心部に、直径八センチほど、中心部深さ五ミリほどのくぼみがある(第4図)。他の例よりもくぼみがはっきりしている。くぼみの内部は平滑に摩耗しており、底面のくぼみ部以外の部分や側壁にごく薄く細かい叩打痕跡が認められるのとは対照的である。側壁の中位には、幅三センチほどの比較的是っきりした錆色が水平に一周するほか、底部でもくぼみの内部にやや薄い錆色の付着が認められる。



第4図 池ノ尾門例に見られる底部のくぼみ

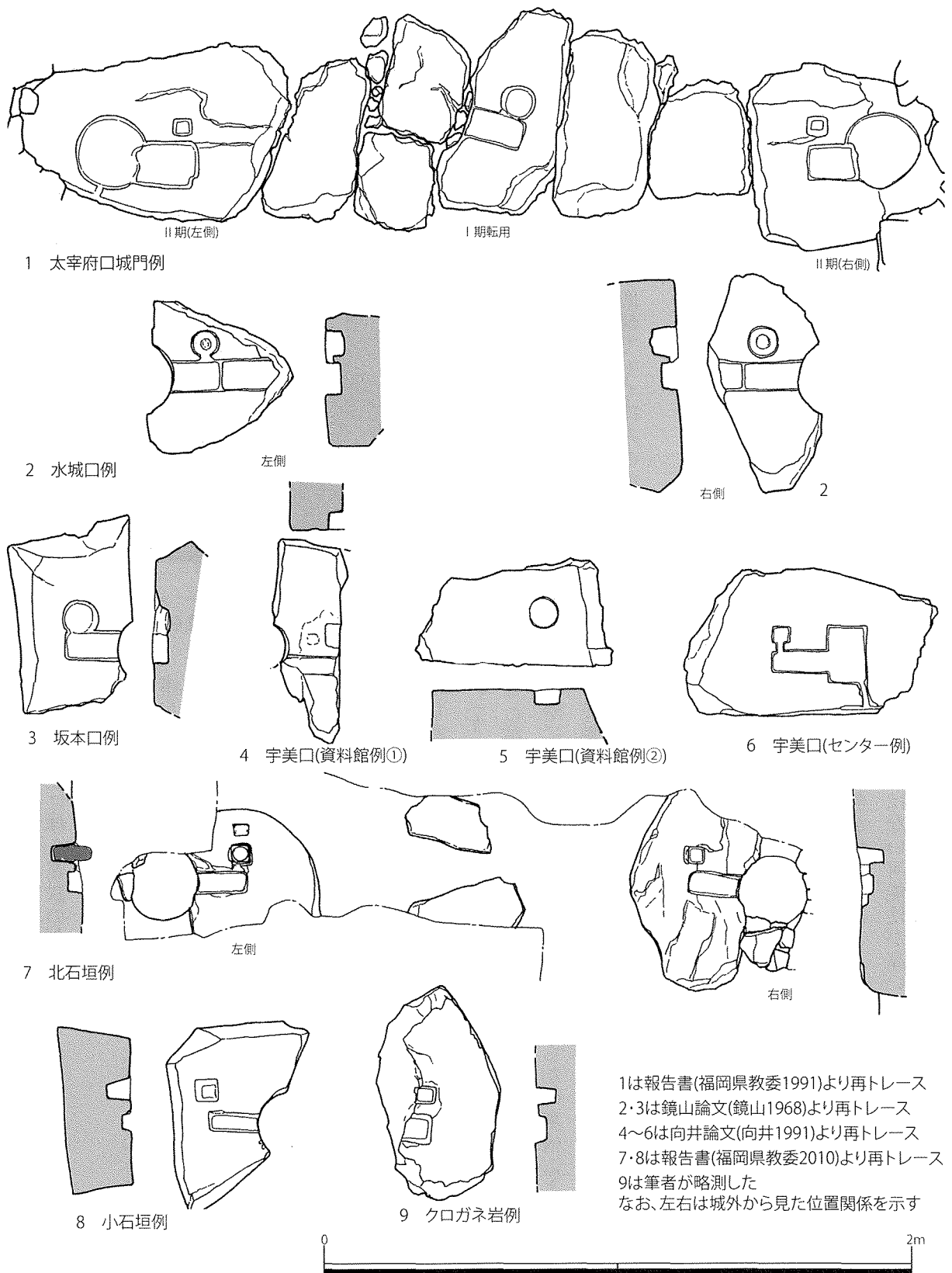
(五) 小結

鞠智城跡で確認された唐居敷四例を見てきたが、詳細な観察によって新しい事実をいくつか指摘できた。簡単にまとめておきたい。まず主柱用加工であるが、深迫門例には礎石建ちの門柱に伴うと見られる柱座の加工(平坦面削出)が見られる点を新たに指摘した。

深迫門跡の発掘調査では門建物の主柱穴が検出されておらず、礎石建ちの門建物が想定される点と整合する。一方、堀切門跡例には掘立柱の門柱に伴う弧状の刳込が見られることは早くより指摘されており、両者の関係が注意される。

軸摺穴であるが、堀切門跡木野神社例以外の各例には、底面に直径八センチほどのごく浅いくぼみが看取されることを指摘した。このくぼみは縁部が明瞭ではなく、断面形はわずかな弧状を呈し、底面は概して平滑で、軸摺穴内部の他の部分で見られるようなごく細かく浅い叩打痕跡が見られないといった特徴を持つ。以上の特徴は、扉の回転軸が直接軸摺穴の底部に当たって軸摺穴の底部が摩耗したと想定すれば整合的に理解できる。この形状の軸摺穴は他の古代山城出土唐居敷でも類例が知られるが、底部に摩耗痕跡を持たないものも多く、底部の摩耗は少なくとも築城時の状態においては生じない(すなわち築城時には軸摺金具²⁾が装着されていた可能性が高い)ことがわかる。後述する大野城跡水城口城門例を参考にすれば、築城時に装着されていた軸摺金具が何らかの事情により除去され、その後軸摺穴に直接扉の回転軸が嵌め込まれて利用されるに至ったと理解するのが最も適切であろう。

さて、池ノ尾門例では、このくぼみの底部に錆色が付着していることが注意される。これまで、軸摺穴内部に付着した錆色はしばしば、鉄製の軸摺金具が装着されていた痕跡と理解されてきた。しかし、鉄製軸摺金具が装着されていれば底部の摩耗は生じないはずである。池ノ尾門例の状況は明らかに、軸摺金具がない状態で使用された後に錆色が付着したことを示しており、錆色は軸摺金具に起因するものではない可能性が高い(八)。



第5図 大野城跡出土の唐居敷諸例

また堀切門跡木野神社例の軸摺穴には、後世の再加工痕が見られる点を指摘した。後述するように、軸の回転による痕跡や後世の再加工は他の古代山城等出土唐居敷の軸摺穴にも見られる現象で、軸摺穴の本来の形状などを検討する上では無視できない情報である。注意を払っておきたい。

以上のような特徴を持つ鞠智城跡出土唐居敷について、ほかの古代に属する唐居敷とどのように関連づけられるのかを検討するために、次に古代山城出土の唐居敷諸例について概観していきたい。

四 古代山城出土唐居敷の検討

(一) 朝鮮式山城出土唐居敷

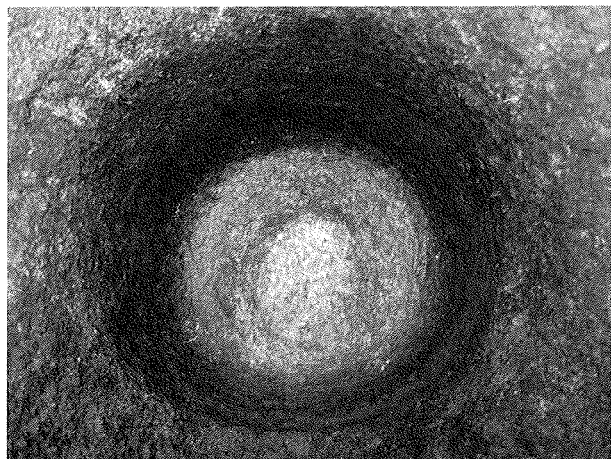
まず、古代山城のうち、築城の契機と築城年代がはっきりしており、滅亡した百済からの亡命技術者の指導により半島の築城技術を直接導入して築かれた、いわゆる朝鮮式山城に属する諸城から出土した唐居敷について、特に軸摺穴の形態に着目しつつ概観したい。

大野城跡例 朝鮮式山城の中で最も多くの唐居敷が出土しているのが大野城跡である（鏡山一九六八、福岡県教委一九九一・二〇一〇、向井一九九九）。太宰府口城門で三例（Ⅰ期城門に付属していたと考えられ、Ⅱ期城門の蹴放し石へ転用されたもの（Ⅰ期例）が一例、Ⅱ期城門に付属していたもの（Ⅱ期城門例）が二例）、坂本口城門で一例、水城口城門で二例、宇美口城門（付近の河川内で採集）で二例（一つは県民の森センターに展示され（センター例とする）、もう一つは宇美町立歴史民俗資料館に展示され（資料館例とする）ている）^(五)、原口城門で二例、北石垣城門で二例、小石垣城門で一例、クロガネ岩城門で一例の計一五例がこれまでに出土

している（図五）。これらのうち、軸摺穴の平面形状が円形プランのものが太宰府口Ⅰ期例・坂本口例・水城口（左右二）例・宇美口資料館例・原口（左右二）例の計八例あるが、このうち原口例はやや例外的な形状を呈する（後述）。一方、平面形状が方形プランのものは太宰府口Ⅱ期（左右二例）・宇美口センター例・北石垣（左右二）例・小石垣例・クロガネ岩例の計七例認められる。

（原口例を除く）軸摺穴の平面形状が円形プランを呈する唐居敷は、いずれも半円形の主柱刳込と方立穴を伴う。方立穴の大きさ（長さ）と幅、軸摺穴の大きさと深さなどの属性においてきわめて規格性が高い一群である。一方軸摺穴の平面形状が方形プランのものは、主柱用加工が円形の刳込（小石垣例・北石垣（左右二）例）、円形の掘込（太宰府口Ⅱ期（左右二）例）、方形の掘込（宇美口センター例）と三種見られ、方立穴の幅にもややばらつきが見られるなど、前者と比べてやや規格性に劣る。以下、特徴的な事例について詳述する。

水城口（左右二）例は、底部が二段底という例外的な形状をもつ。そこで、シリコンを用いて型を取り底部を詳細に観察した。すると、軸摺穴の壁体には叩打による調整痕が残る一方、

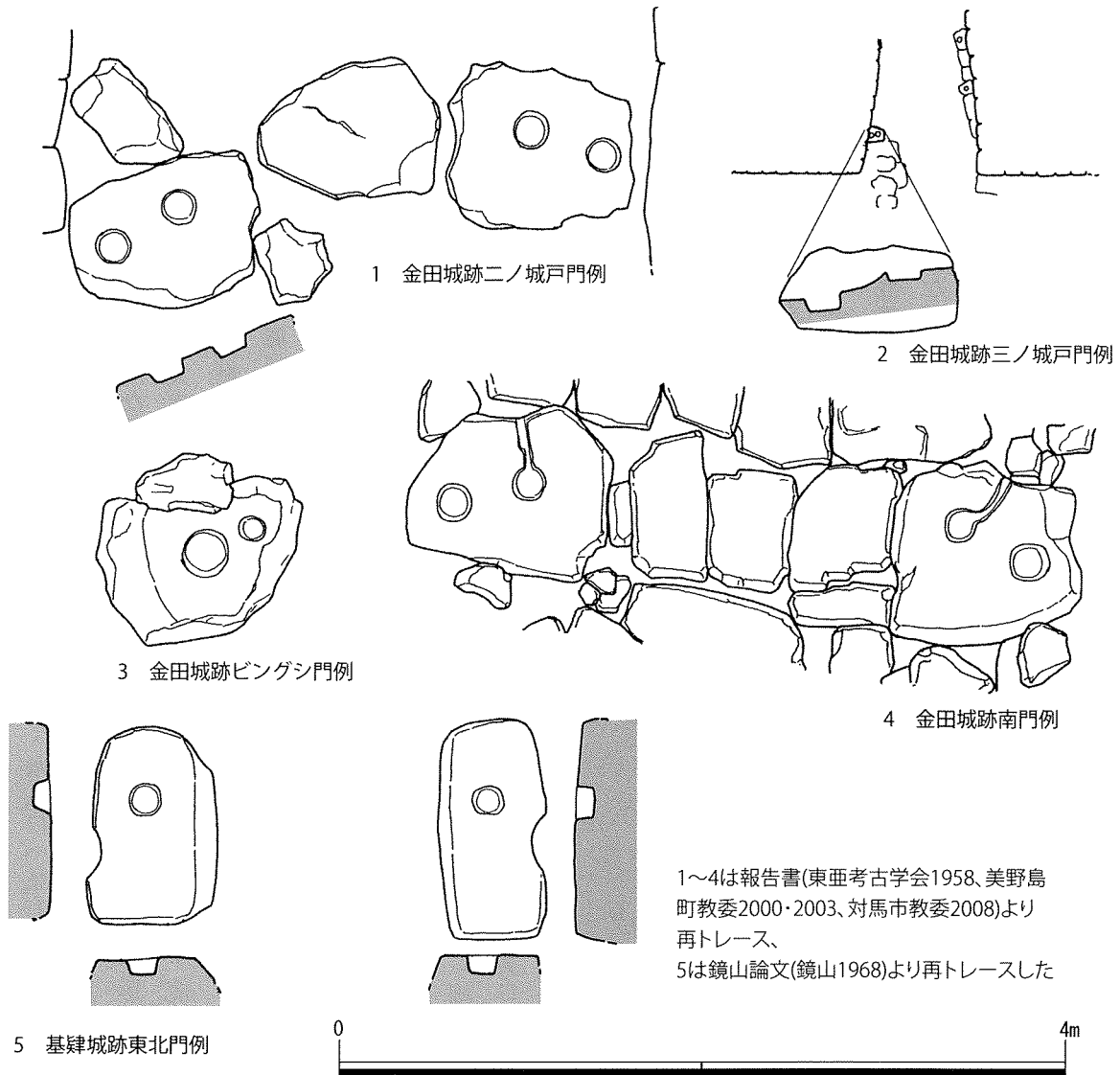


第6図 水城口城門の右側唐居敷に掘り込まれた軸摺穴

二段底の壁部分は平滑で調整痕が認められないことがわかった（図六）。摩耗により調整痕が消滅し、平滑面が形成されたものである。軸摺金具が嵌装されていればこのような痕跡は残らないため、二段底の形成は軸摺金具を伴わない軸摺穴の使用 방법에伴うものとみることができる。二段目の穴が当初の軸摺穴よりかなり小さく（直径十センチ弱）、掘方がいびつで、加工も雑であることなどから、（おそらく後世に）軸摺穴より一回り小さい扉の回転軸を直接差し込んで使用するとき、穴が大きすぎ、回転軸の位置がぶれて扉がうまく閉まらなくなるのを防ぐため、底部をさらに一段掘り込んで軸を安定させたものと考えたい。同様の底部のくぼみは坂本口城門例でも確認できるが、こちらは内部の風化が進み詳細な検討は難しい。

北石垣城門例のうち城内に向かって左側の唐居敷軸摺穴には、鉄製の軸摺金具が嵌装された状態で遺存していた。国内で唯一、古代山城から出土した軸摺金具でありまた、铸造で、国産の鉄素材を用いて作られた可能性が高い（大澤・小澤二〇〇九）ことから、最古の国産铸造鉄製品である可能性が極めて高い。

また、水城口例、宇美口資料館例、小石垣例、クロガネ岩例には穴の内側（壁面）に鉄錆色の付



第7図 金田城跡・基肄城跡出土の唐居敷諸例

着が認められた。

原口（左右二）例は、軸摺穴のみ掘り込まれ、平面が円形であるが、ほかの同様の例とは異なり、断面形状が浅い半球形を呈していた。出土時の観察では、内部には回転方向の擦痕が多く認められ、内面は平滑に摩耗していた。ほかの軸摺穴には認められないこれらの特徴は、軸摺金具を用いず直接回転軸を唐居敷に据えたことを示す。詳細は正式報告を待ちたいが、この城門が他例と比較してやや規模が小さかったことも関連し、本例は例外的な存在とみたい。

基肄城跡例 基肄城跡からは東北門跡で一对二例の唐居敷の出土が知られる（第7図―5）。唐居敷は方立穴が省略され、やや浅い弧状の主柱刳込と平面円形の軸摺穴が掘り込まれる。軸摺穴の深さは比較的浅い。鏡山氏の報告によれば軸摺穴の底部にそれぞれ鉄錆が付着していたとのことであった（鏡山一九六八）。

金田城跡 金田城跡では古くから二ノ城戸・三ノ城戸と呼ばれる地点にそれぞれ一個ずつの唐居敷が見られることが知られていた（東亜考古学会一九五三）が、近年史跡整備に先立つ発掘調査が進められ（美津島町教委二〇〇〇・二〇〇三、対馬市教委二〇一〇）、二ノ城戸門で対となる唐居敷が出土したほか、新たに発見されたビングシ門と南門でそれぞれ一個・一对二個の唐居敷が出土した（第7図―1と4）。これらの唐居敷にはいずれも二つの円孔が対となって穿たれており、ビングシ門例は二つの穴の大きさが異なるが他はほぼ同じ大きさで、穴間の距離や城門における位置などの諸属性がよく類似する。ただし南門の二例のみ軸摺穴に排水溝を伴う点がやや異質ではある。

（二）神籠石式山城出土唐居敷の軸摺穴

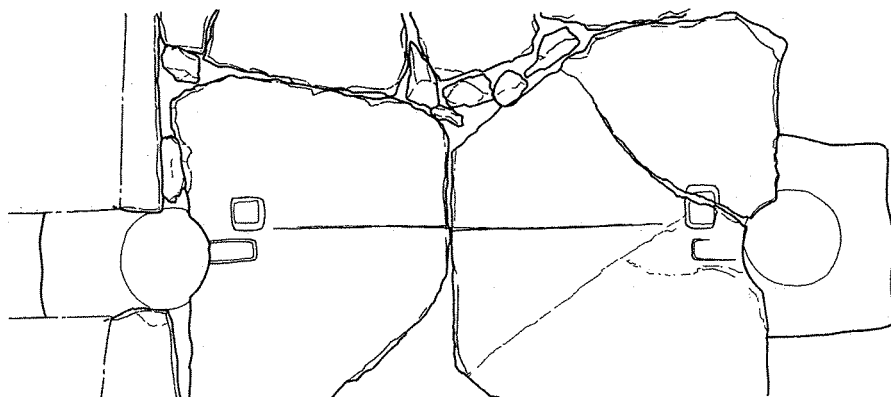
神籠石式山城のうち、北部九州に分布する北部九州型神籠石式山城の城門からは、石製の唐居敷はこれまで一例も発見されていない。城門に扉が付かないか、石製唐居敷を用いない扉の固定方法がとられたのであろうが詳細は不明である。一方、瀬戸内に分布する瀬戸内型神籠石式山城については、鬼ノ城跡において四力所から二例ずつ計八例の石製唐居敷が出土している。また、石城山神籠石・讃岐城山城跡・播磨城山城跡などから、軸摺穴を伴わない点を除いては鬼ノ城跡北・西・南門例と形態が共通する石材が数点出土しており、城門の一部を構成する石造物であることは確実だが、これらは軸摺穴を伴わないため唐居敷とは呼べず、本稿の検討では除外する。

鬼ノ城跡（岡山県） 鬼ノ城跡では発見された東西南北四つの城門全てから一对ずつ、計八つの唐居敷が発見されている（第8図）。東門を除く三例は主柱用刳込が方形で方立穴は幅広く、（隅丸）方形の軸摺穴を持つていて規格性が高い。上述の通り瀬戸内型神籠石式山城でしばしば見られる加工石材と共通性が高い一群である。一方、東門例は軸摺穴が方形な点は同じだが、主柱用刳込が半円形ではかの三門例とは大きく異なる印象を受ける。大野城跡出土の円形軸摺穴を持つ唐居敷の一群と形態的に共通する点は注目される。

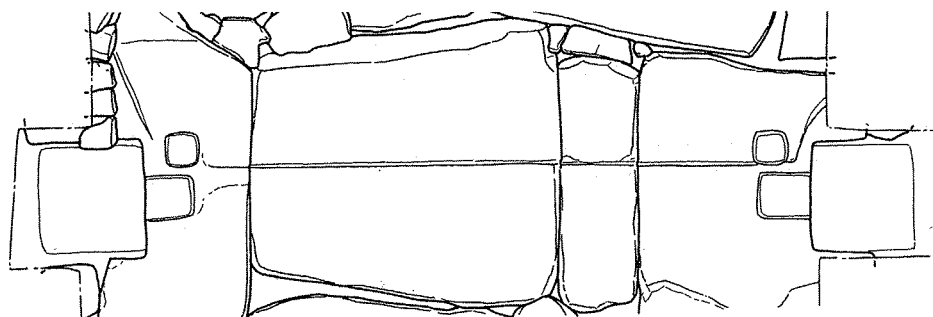
（三）その他の古代城郭出土唐居敷の軸摺穴

古代山城ではないが、朝鮮式山城とほぼ同時期に、やはり白村江の敗戦と百済の滅亡を受けて築かれた水城跡からも、唐居敷が数例見つかった。参考として簡単に見ておく。

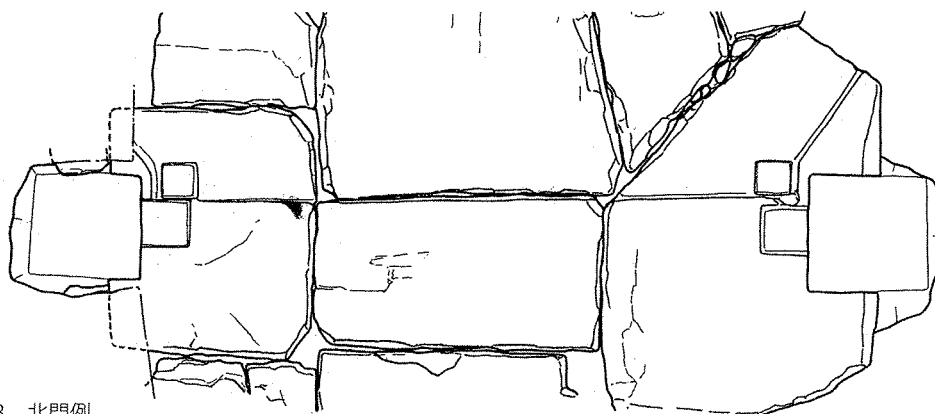
水城跡 東門と西門（付近）から城門に関連すると見られる石材が



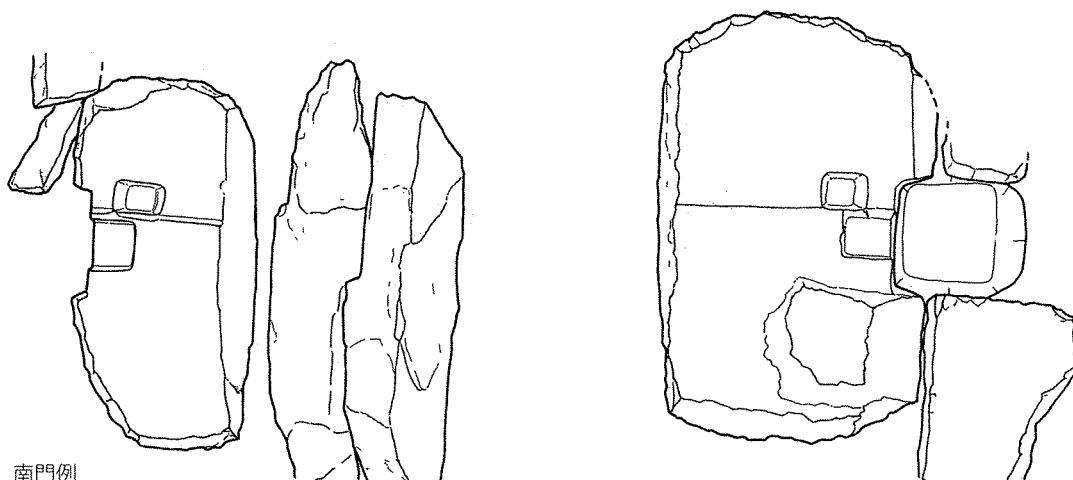
1 東門例



2 西門例

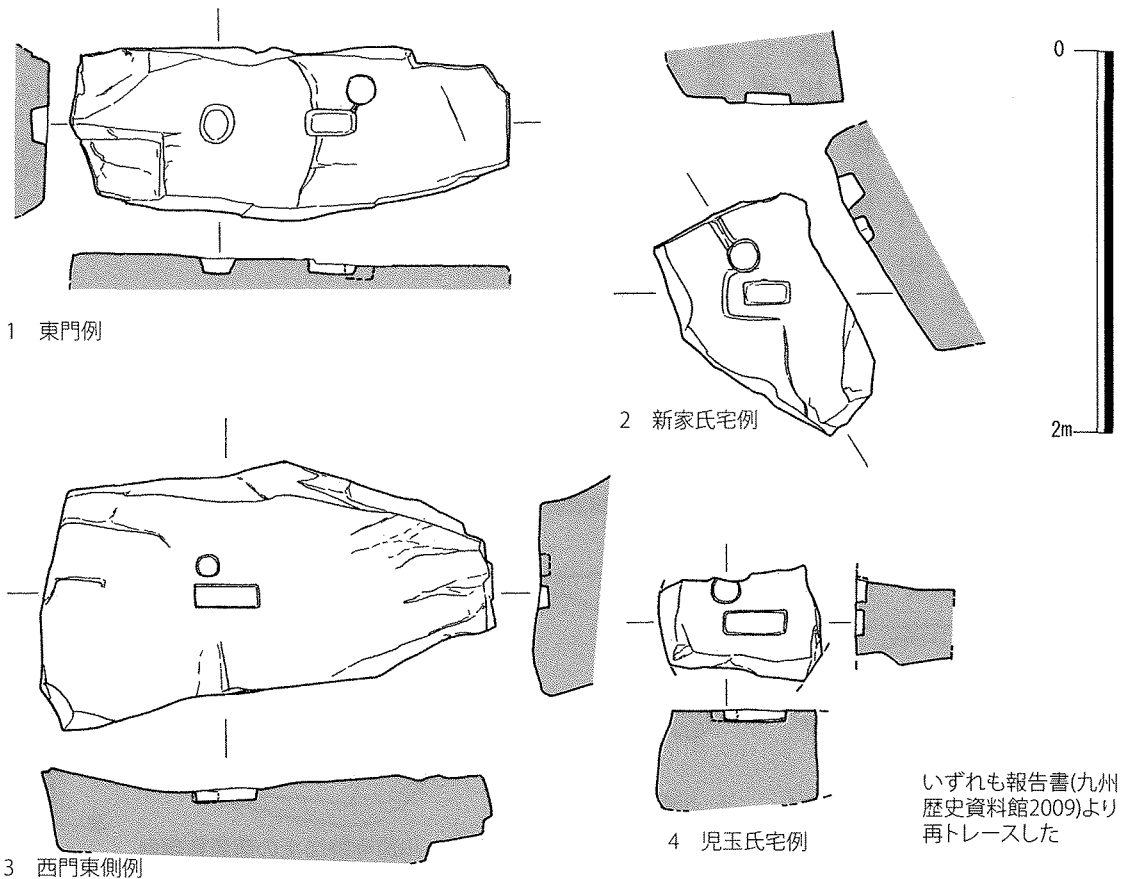


3 北門例



4 南門例

いずれも報告書(総社市1995・1996・1997・1998・2005・2006)より再トレースした
第8図 鬼ノ城跡出土の唐居敷諸例



第9図 水城跡出土の唐居敷諸例

見つかり、あるいは伝わっている（九州歴史資料館二〇〇九）。いずれも原位置から移動している。このうち、東門推定地の唐居敷（東門例）・新家氏宅例・西門東側例・児島氏宅例（二例のうち軸摺穴が掘り込まれた一例）の四例が軸摺穴を伴い、明らかに唐居敷と考えられる（第9図）。東門例と新家氏宅例はやや短い長方形の方立穴、円形の軸摺穴を持つほか、方立穴に隣接して直径一〇〇センチ程度の円弧状の段が掘り込まれる。東門例はこの段の中央に小さな円形の臍穴を持ち、ともに主柱用加工の一種とみられる。両者は伝承される出土位置こそ異なるものの各種加工の大きさや位置関係がよく類似しており、同時期に東西両門で用いられたものと考えたい。

西門東側例は西門から掘り出されたと伝えられ、もと百田氏宅にあったもの（鏡山一九六八）を西門北側の上成土塁背後（下成土塁上）に移動したものである。児島氏宅例は東門出土と伝えられる。いずれもやや縦長の長方形の方立穴と円形の軸摺穴を持ち、主柱用の加工は見られないが、軸摺穴と方立穴の位置関係から門主柱用の礎石を兼ねていたと見て間違いない（平坦面加工）。やはり軸摺穴や方立穴の加工形状や位置関係がよく似ており、おそらく同時期に加工され東西両門で使用されたものと見られる。

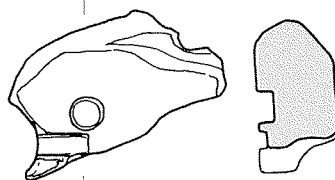
九州歴史資料館による水城跡西門の調査では門建物が三期にわたって作り替えられ、Ⅰ期は掘立柱建物、Ⅱ・Ⅲ期建物が礎石建ちとされる。上記の唐居敷はいずれも礎石建ちで二時期分と考えられ、Ⅱ期（八世紀前半）・Ⅲ期（九世紀代）の建物に伴うものと考えれば整合性がある。

(四)その他の古代の唐居敷諸例

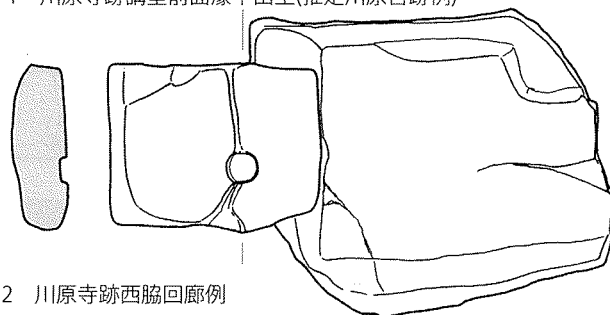
そのほか古代に属する唐居敷として、宮城跡・官衙跡・寺院跡などからの出土例が知られる。その中には作られた年代が推定できる例もいくつか知られ、古代山城出土唐居敷の検討を行う際の参考となることもある。抜粋して見ておく。

川原寺跡 七世紀後半の創建と推定される奈良県川原寺跡からは三例の唐居敷の出土が知られる(第10図)。うち二例は川原寺跡の回廊建物に伴うもので、小さな円形の軸摺穴が掘られており、山田寺跡など寺院跡に多くの類例が知られる。一方、講堂前の濠中から出土したとされる一例は川原寺創建直前に当地に営まれた仮宮である川原宮(六五五〜六五六)に伴う可能性が高く、円形の支柱刳込、長方形の方立穴、円形の軸摺穴を持つ大野城跡で多く

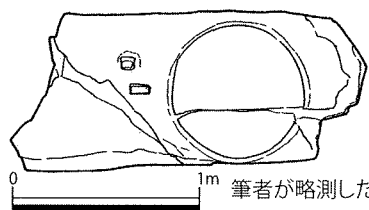
いずれも報告書(奈文研1960)より再トレースした



1 川原寺跡講堂前面濠中出土(推定川原宮跡例)

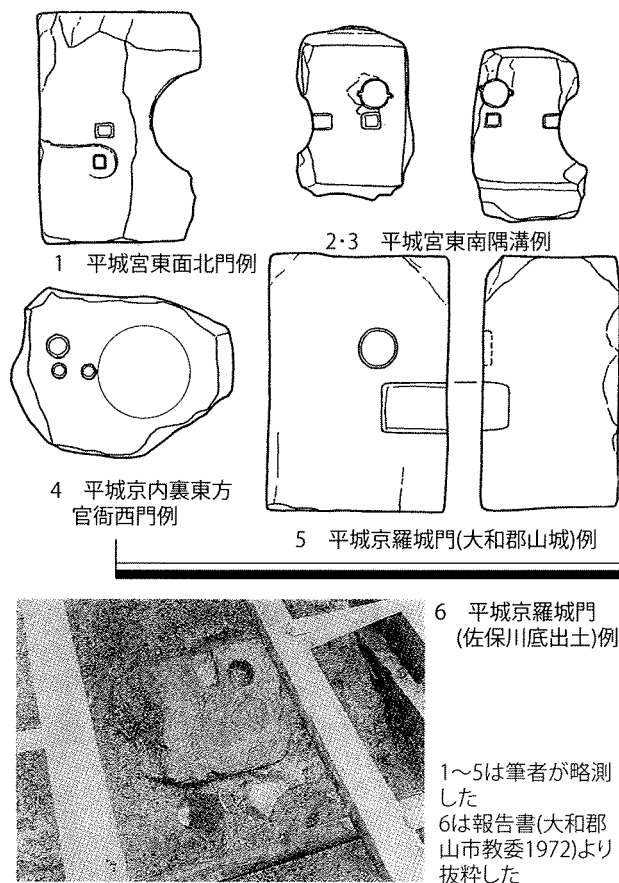


2 川原寺跡西脇回廊例



第11図 大宰府政庁跡出土の唐居敷

第10図 川原寺跡出土の唐居敷諸例



第12図 平城京跡出土の唐居敷諸例

見られる形式の唐居敷がやや小型化したもので注目される。

大宰府政庁跡 七世紀後半より数期の変遷が明らかとなっている大宰府政庁では、Ⅱ期(八世紀初頭)の南門に伴うとされる唐居敷が一例、現地に今も遺存している。円形の作り出し柱座、方立部材用の小さな臍穴、小さな方形の軸摺穴を持つもので(第11図)、一九六〇年代に調査を行った鏡山猛氏の報告には、軸摺穴の周囲に円形の痕跡が記されており注意される(鏡山一九六八)。次に述べる平城宮例とともに、韓国で最近出土が相次いでいる軸摺金具の形式の装着痕跡と考えられ注意される。

平城宮跡 平城宮東面大垣付近から出土した唐居敷(奈文研一九九二)は宮城東面北門に付属する唐居敷でやはり八世紀初頭に属する可能性が高い例である。円柱用の半円形の支柱刳込と小型の

1~5は筆者が略測した
6は報告書(大和郡山市教委1972)より抜粋した

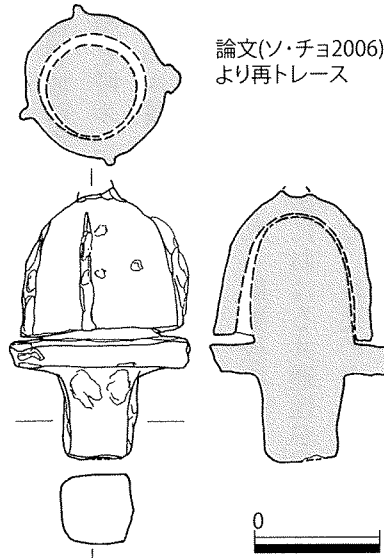


1 報恩三年山城西門跡の石製唐居敷



2 河南二聖山城東門跡の石製唐居敷

方立部材用臍穴、小型の方形軸摺穴を持つ（第12図―1）。特記すべきは、軸摺穴のまわりに一回り大きな円形の浅い掘り込みが認められる点である。半島に類



第14図 韓国忠州山城北門跡出土の鉄製軸受け金具

論文(ソ・チョ2006)より再トレース

例があり（第13図）、大宰府政庁南門例に着装が想定されるものと同じタイプの軸摺金具（第14図）の着装が想定される。

平城宮・京内からはこのほか五例ほどの唐居敷の出土が知られる（第12図―2～6）。これらは、軸摺穴が円形プランである点は共通するが、主柱用加工が半円形の刳込（平城宮東南隅溝出土、S B

第13図 大宰府政庁南門例などに類似する韓国出土唐居敷の類例

四九五一付属二例）であつたり円形の作り出し（平城宮内裏東方官衙西門例・平城京羅城門（川底出土）例）であつたり、あるいは方立穴が大きな長方形（平城京羅城門（川底）例・同（大和郡山城転用）例）であつたり小さな円形（平城宮内裏東方官衙西門例）・方形の臍穴（平城宮東南隅溝S B四九五一付属二例）であつたりといった相違点がある。すべてが平城京建設当時のものというわけではなく、八世紀を通じて作り替えられる中で幾多のバリエーションが生じたものか。

五、唐居敷の類型化と編年（第15図）

以上のように古代山城をはじめとする古代の建築物に伴う唐居敷を概観してきた。これらの資料を基に、古代山城出土唐居敷の分類と編年を試みたい。ここでは、最も多くの唐居敷が出土している大野城跡の事例を軸に検討したい。

大野城跡出土唐居敷の中で最も数が多い類型が、半円形の主柱刳込と方立穴、平面円形の軸摺穴を持つタイプである。水城口例（二例）のみ蹴放し用の加工を伴う点でやや相違が見られるが、既述のように唐居敷の各部位の大きさ、調整方法などに共通性が高く、きわめて規格性が高い一群である。これを、大野城Ⅰ型とする。太宰府口城門では、このタイプの唐居敷がⅡ期城門の蹴放し石に転用されており、本類型が大野城築城時に広く採用された形式であると判断できる。本類型の初現は今のところ（やや小型ではあるが）七世紀中葉の推定川原宮例があり、七世紀第二～第三四半期に主に用いられた唐居敷の形式と評価できよう。

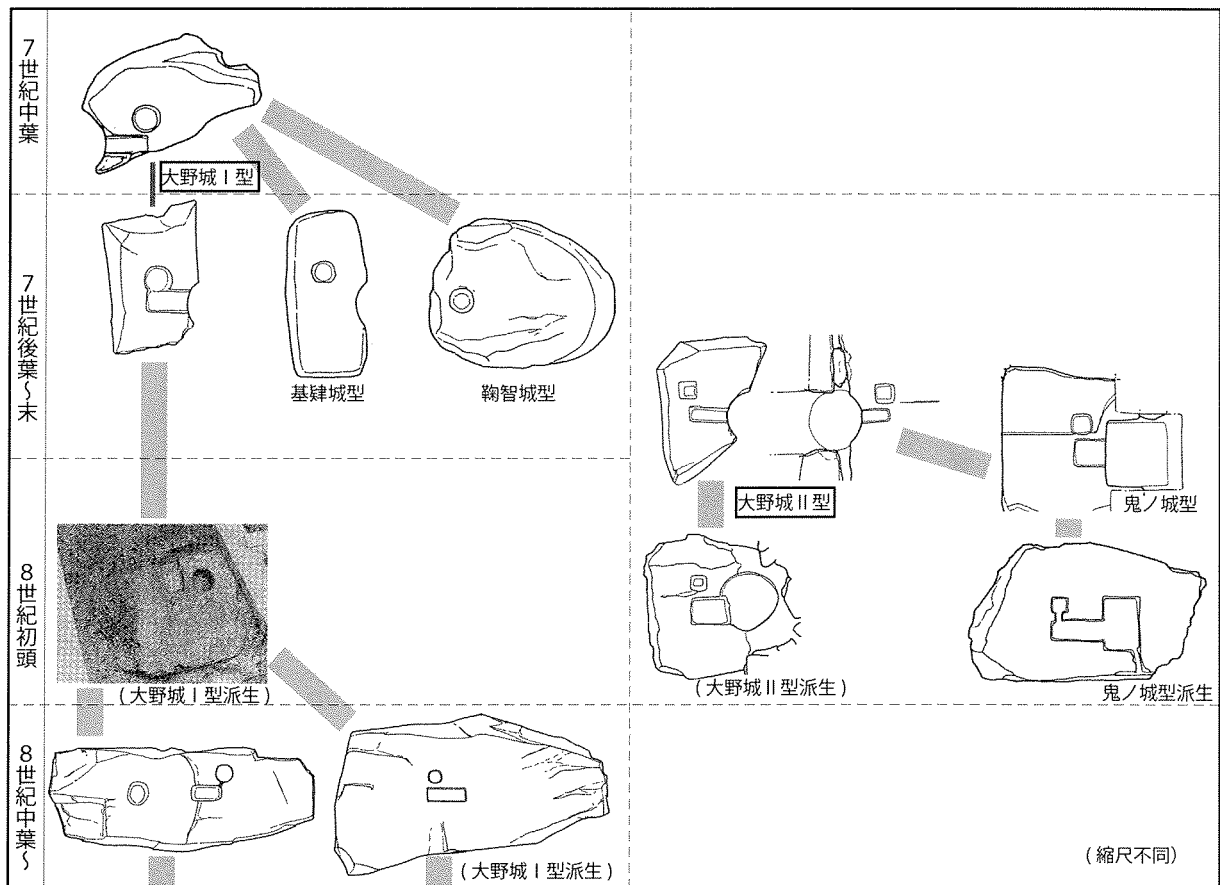
また、同時期に築城された朝鮮式山城では本類型の派生類型と考

えられる例がいくつか見られる。いずれも、唐居敷の本質的属性ともいえる軸摺穴の形状が大野城Ⅰ型と共通している点が特徴で、大野城Ⅰ型から軸摺穴以外の属性を省略することにより成立したものと理解できる。一つは、基肄城跡東北門と鞠智城跡堀切門で用いられる形式で、大野城Ⅰ型から方立穴を省略した形式である。これを基肄城型とする。もう一つはさらに主柱用加工を省略する（平坦面加工のみ）もので、鞠智城跡深迫門・池ノ尾門で用いられる形式である。これを鞠智城型と呼ぶこととする。

両者ともに、唐居敷の本質的属性であり、省略が不可能な軸摺穴の形状や調整技法が、大野城Ⅰ型のそれによく類似しており、また基肄城型では主柱刳込の表面に見られる調整技法なども大野城Ⅰ型によく類似することから、製作技法における共通性が高く時代的にごく近接した形式であると推測できる。後述のように、大野城Ⅰ型は大野城跡では築城期のみに見られる類型であることから、そこから派生した二つの類型もやはり大野城跡の初築にきわめて近い年代に限定でき、七世紀第三四半期のみを用いられたものと推測できる。

一方、これらに対し金田城跡で用いられる軸摺穴と主柱掘り込みをもつ唐居敷は、軸摺穴の形状こそ大野城Ⅰ型などに類似するものの、主柱用加工が小円孔で単純に大野城Ⅰ型からの派生形式と評価するにはややためらいがある。金田城型と呼ぶが、製作時期を含めその位置づけは今のところ保留せざるを得ない。

また大野城Ⅰ型の派生形式としてはほかに平城京羅城門（川底例）をその可能性のあるものとしてあげておきたい。軸摺穴や方立穴の形状や位置は大野城Ⅰ型と類似し、主柱用加工が円形の作り出し柱座となる。平城京建設当時のものとすれば八世紀初頭に位置づ



第15図 石製唐居敷の分類と編年

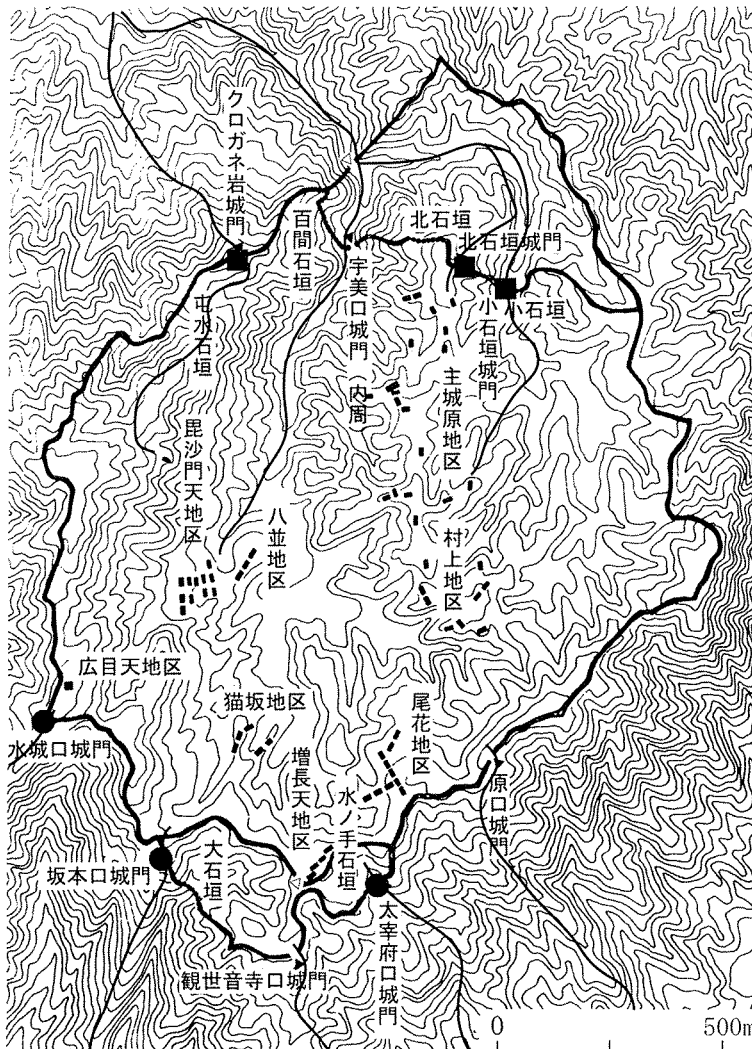
けられ、掘立柱建物に適合するよう作られた大野城Ⅰ型が、より新しい建築様式である礎石建物に適合するように改変されたものといえる。この類型は水城跡東門例（主柱用加工に臍穴が加わる、八世紀前半か）に受け継がれるとともに、同じく水城跡西門東側例・同児島氏宅例などの派生形式（主柱用加工が省略される、九世紀代か）を生み出していくのであろう。

大野城跡において見られる唐居敷の類型で次に数が多いのが、軸摺穴が平面方形のタイプである。方立穴を伴い、主柱用加工が半円形の削込のもの、円形掘り込み、方形掘り込みの三者が見られる。

最も数が多いのが主柱削込が半円形の類型で、安定した形式と評価できる。これを大野城Ⅱ型とする。いずれも大野城跡の北側の城門で用いられる形式である。本類は、大野城跡以外では鬼ノ城跡東門に類例が見られるほか、本類を元にいくつかの派生形式が成立している。一つは鬼ノ城跡西・北・南門例で、主柱用加工が方柱の門建物に適合するよう改変されたものと考えられる。方立穴もやや太くなるが、これは後述する太宰府口Ⅱ期例と同じ変化の方向性で見られる。これを鬼ノ城型とする。もう一つは大野城跡太宰府口例で、主柱用加工が円形の掘り込みとなる。大野城Ⅱ型を礎石建物用に改変したものと評価できる。門自体の規模が大きいため方立穴も大型化したものであろう。一方宇美口センター例は、方立穴の規模はそのまま、主柱用加工が方柱の礎石建物用に変更されたタイプで、やはり大野城跡Ⅱ型の派生形式で鬼ノ城型の後続形式と評価できよう。

ここで、大野城Ⅰ型とⅡ型の関係について整理しておく。大野城Ⅰ型は、七世紀中葉に出現して七世紀第三四半期にかけて使用されるときともに、派生類型を多く生み出している。七世紀第四四半期の類例は見られないが八世紀初頭には主柱用加工が礎石建物に適合するよう改変されている。一方大野城Ⅱ型は、派生形式である太宰府口Ⅱ期例が築城時に採用されたⅠ期例の後続形式として採用されていることから、Ⅰ型に後出する形式である可能性がある。

別の視点からこの可能性を検証しよう。大野城跡における大野城Ⅰ・Ⅱ型のそれぞれを採用した城門跡の位置をみると（第16図）、



第16図 大野城跡の城門配置

I型は水城口・坂本口・太宰府口（I期）・宇美口の各城門で採用されているが、これらのうち水城口・坂本口・太宰府口城門の三つが城の南側に位置し、それぞれ国分寺・国分尼寺、大宰府政庁、観世音寺からの最寄りの登城口となっている。一方、II型は小石垣・北石垣（・そしておそらくクロガネ岩）の各城門で採用されているが、これらの城門はいずれも城の北側に位置し、これらの城門へと至る登城路はすべて大野城跡から北に流れ出す内野川の谷筋から分岐していて、どの城門を出ても宇美口城門への登城路へと集約される。

大野城の築城時の目的は第一義的には白村江の敗戦を受け国内の防備を固めることであり、具体的には、軍事拠点である大宰府政庁の北側の守りを固め、またいざというときの逃げ込み・籠城拠点となることが期待されたとされる。城の南側の城門の配置はまさに大宰府政庁とその周辺の重要施設群から城内へと至る最短ルートを結んでおり、逃げ込み城としての大野城跡の機能を果たすために計画的に配置されたことが読み取れる。しかし、城の北側の各城門についてみれば、城門を出て行き着く先はすべて同じ谷筋（登城路）へと出る。極言すれば、宇美口城門以外の城門は存在しなくても城の北側への出入りは問題なくできるのであり、城郭としての大野城には必ずしも必要不可欠な施設ではない。それどころか、戦いに備える施設としての城郭にあつては、守備側の弱点となる城門は少ないに越したことはなく、むしろ余計な施設とも評価されてしまう。

一方、宇美口を除く北側各城門と城内各地区との関係を見ると、小石垣城門は南に村上地区礎石群が、北石垣城門は南に主城原地区礎石群が、クロガネ岩城門は南にやや離れて毘沙門天地区礎石群が

それぞれ控えており、各城門の配置には城内の各地区へのアクセス改善をはかる意図が感じられる。詳細はいずれ機会を経て発表したのが、宇美口城門を除く北側の各城門は、築城当初には存在しなかったものが、築城後の国際関係の変化により大野城跡に期待される役割が変化したことを受けて、（具体的な時期は絞りこめないが、七世紀第三四半期後半～第四四半期中に）大野城跡の改修が行われた際に新たに築造された可能性を考えたいのである¹⁰⁰。このように考えれば、大野城跡の築城時には大野城I型の唐居敷が採用され、その後の改築時には大野城II型の唐居敷が採用されたことになり、I型よりもII型が後出することを示す傍証となろう。

次に大野城II型の消滅期について検討しよう。北石垣城門の唐居敷に残された鉄製軸摺金具は、基部が太い方柱で独特の形状をしている。理化学分析により国産品である可能性が高いことがわかっており（小澤・大澤二〇〇九）、大野城II型の唐居敷軸摺穴に適合するよう半島の軸摺金具を改変して作られたと考えられる。ところが、八世紀初頭に位置づけられる大宰府政庁南門例・平城宮東面北門例では同じく方形の軸摺穴を採用しながらその大きさは大野城II型と比較して小型で、着装痕跡などから半島で類例が知られる軸摺金具が採用されたことが明らかである。これも紙幅の都合上詳細は別項に譲りたいが、おそらく、大野城II型は半島から新たな形の軸摺金具が流入したことにより軸摺穴が小型化した新たな形式の唐居敷II大宰府型に取って代わられたと考えられ、大野城II型の存続時期は八世紀初頭までのごくわずかな期間と考えられるのである。なお、新たに成立した大宰府型も後には続かず短期間で消滅する。

以上から、白村江の敗戦を受けて七世紀第三四半期に作られた朝

鮮式山城においては、大野城Ⅰ型とその派生形式の唐居敷が用いられたが、その後の社会情勢の変化を受けて城が改築され、あるいは新たな城が築城されるに及んで大野城Ⅱ型の唐居敷が用いられるようになったことがわかる。八世紀初頭以降は急速に大野城Ⅱ型系統の唐居敷は使用されなくなり、大野城Ⅰ型の後継形式が様々に変化しながら用いられるものと理解したい。

六、古代山城の中での鞠智城の位置づけ

筆者は以前、石垣と土塁の工法を検討し、築城時に用いられた技術的な共通性を軸に、古代山城を朝鮮式山城・北部九州型神籠石式山城・瀬戸内型神籠石式山城の三種類に分類し、さらに各類型に用いられた技術の近縁性から、朝鮮式山城と瀬戸内型神籠石式山城、瀬戸内型神籠石式山城と北部九州型神籠石式山城のそれぞれが比較的近い関係にある一方で、朝鮮式山城と北部九州型神籠石式山城はやや遠い関係にあることを指摘した（小澤二〇一二）。

本稿において唐居敷の形式を検討する中で、これらのうち朝鮮式山城と瀬戸内型神籠石式山城とは、鬼ノ城跡を介して時間的な位置関係を推定することができたことがわかった。すなわちまず、七世紀第三四半期の朝鮮式山城の築城においては、七世紀第二四半期にすでに国内に導入されていた大野城Ⅰ型とその省略型派生形式である基肄城型・鞠智城型が、築城時の唐居敷の形式として広く採用された。その後七世紀の時間幅の中で国際情勢の変化に対応した大野城の大規模改修が行われ、この際には大野城Ⅰ型の軸摺穴の形状を変更して新たに成立した大野城Ⅱ型の唐居敷が用いられた。さらに、同じく七世紀の中において鬼ノ城が築城され、この時には大野城Ⅱ

型とその派生形式である鬼ノ城型が用いられた。鬼ノ城型はまた、軸摺穴が省略されて唐居敷としての役割が失われつつも主柱の添え石として瀬戸内型古代山城で広く使われるに至った。

これらに対し、北部九州型神籠石式山城ではこれまで唐居敷が出土しておらず、この側面から朝鮮式山城や瀬戸内型神籠石式山城と直接比較するのは困難である。あえて関連性を見つけようとするならば、鬼ノ城跡以外の瀬戸内型神籠石式山城では石製唐居敷から軸摺穴が失われて唐居敷の用を果たさなくなっている点は注目されよう。扉の回転軸を木製の部材で固定するようになったか、あるいは扉自体が付属しないようになったか、現段階では定かではないが、いずれにしても石製唐居敷が遺存せず、この点において瀬戸内型神籠石式山城は北部九州型神籠石式山城と近い位置に位置づけられるかもしれない。鬼ノ城型唐居敷の構造を残す主柱添え石が見られる瀬戸内型神籠石式山城がより朝鮮式山城に近く、それすらも出土しない北部九州型神籠石式山城が最も朝鮮式山城から離れた位置にあると評価でき、これは石積技術から見た近縁性ともよく整合する。

以上から、西日本に広く分布する古代山城の各類型のうち少なくとも朝鮮式山城と瀬戸内型神籠石式山城の関係は、前後関係に位置づけることができる。北部九州型神籠石式山城の位置づけにはまだ問題が残るが、瀬戸内型神籠石式山城の後続形式である可能性を指摘したい。ここにおいて鞠智城跡の唐居敷を見ると、深迫門例は鞠智城型、池ノ尾門例もまたその可能性があり、一方堀切門例は基肄城型に分類できる。これらはいずれも大野城Ⅰ型からの省略形派生形式として位置づけられる。従って、鞠智城の築城は七世紀第三四半期の朝鮮式山城各城の築城にきわめて近い時期であり、大野城Ⅱ

型の唐居敷の登場以前であることは疑いない。大野城Ⅱ型は大野城跡の改築に伴い成立したものとみられ、鞠智城跡の築城は大野城の改築以前に位置づけられるが、鞠智城の築城期の下限を決めるこの改築が、果たしていつごろなされたかについては、残念ながらいまだ検討材料が不足しており、今後の課題としておきたい。

おわりに

鞠智城跡はこれまで史書の記述を主なよりどころとして朝鮮式山城の一群に数えられてきたが、本稿の検討により、城門に残された石製唐居敷の構造から見ても白村江の敗戦を受けて築城されたことが記録に残る朝鮮式山城ときわめて近い関係にあることが示された。また、筆者は以前、土塁の築造技術においても鞠智城跡が他の朝鮮式山城ときわめて近く位置づけられることを示しており、総合的に判断して、鞠智城跡は七世紀第三四半期に築城された朝鮮式山城の一つとして位置づけることが適当と考えられる。朝鮮式山城の築造技術系について筆者は以前、石積技術についても特徴的な技術体系が存在したことを指摘したことがある。鞠智城跡にも、馬こかし・三枝という二カ所の石積（石垣）が知られるが、これまでこれらは築城時にさかのぼる確証がないとして本格的な調査がなされないまま敷の中に埋もれたままになっている。しかし、熊本県教育委員会により作成された簡易な立面実測図（熊本県教委一九八三）をみると、（特に馬こかしの石垣は）重箱積み・単位布積みといった朝鮮式山城の石垣に特有の構造があるように見える。鞠智城跡が朝鮮式山城の一種であるという評価をさらに固めるためにも、今後石垣の構造を含めた築城技術のいつそうの解明を期待したい。

謝辞

本稿は、熊本県教育委員会による平成二五年度鞠智城跡『特別研究』の成果報告である。研究に採択いただき、またこのような発表の場を与えていただき感謝申し上げます。

また、本稿をなすにあたっては、多くの方々にご指導・ご教示をいただき、また資料調査へのご協力を賜った。末筆ながらお名前を記して謝意を表します。

今井晃樹・入佐友一郎・大澤正己・大田幸博・大森真衣子・小鹿野亮・小田富士雄・小田裕樹・加藤和歳・亀田修一・城戸康利・下原幸裕・杉原敏之・重藤輝之・中川二美・西谷正・能登原孝道・林知恵・平ノ内幸治・松尾尚哉・向井一雄・矢野裕介・吉田東明・吉村靖徳・渡辺誠・車勇杰・成正鏞・李明玉・朴亨彬・ソジェヨン（敬称略、順不同）

注

- (一) ここでは、史書に記載された山城群のうち、白村江の敗戦を受けて築城されたことが明確なものを『朝鮮式山城』とした。これらは、亡命百済人技術者の指導を受けてほぼ同時期に築城したために、用いられる築城技術に共通性が高い一群であると推測でき、形式名称として使用している（小澤二〇一二）。瀬戸内型神籠石式山城・北部九州型神籠石式山城の用語についても拙論（小澤二〇一二）による。
- (二) 旧国名については、史書記載の山城については記載通りとし、そのほかについては便宜的に分国後の名称をとった。
- (三) 出土土器の評価を巡っては、その編年上の位置と実年代のみならず、土器の製作年代と城に持ち込まれた年代の相違の可能性、あるいは土

器が城の築城あるいはそれに限りなく近接した時期に廃棄されたものか、または城が機能している時期の中のいずれかの段階で廃棄されたものであつて築城時期よりは少なからず遅れたものであるのかという問題があり、出土時を根拠として築城の時期が白村江の戦いあるいは朝鮮式山城群の築城の前なのか、あるいは後なのかといった厳密な時期比定を行うのは困難な状況が続いている。

(四) ただし、丁寧な平坦加工の範囲は門柱が立つにはやや狭く、横にさらに石材を置いた可能性もあろう。

(五) この部分については石材の風化により剥離した可能性も考えたが、穴の縁部分の加工の様子などからするとやはり加工によるものと判断したい。

(六) 木野神社では手水鉢のような位置においてあつたといい、神社に移された際(五〇年ほど前という)にでも手が加えられたのではないだろうか。

(七) 筆者はこれまで、扉の回転軸を摩耗から保護するために装着された金具について、「軸受け金具」と呼称してきた。これは、回転軸の下にある唐居敷に嵌め込まれて回転軸を受けるものを主に想定していたためであつた。しかし、回転による摩耗は扉の下側だけではなく扉の上部の固定箇所についても生じるもので、この箇所を摩耗から保護するための金具と考えられる遺物が出土しているという山田隆文氏の鋭い指摘(山田二〇一一)を踏まえ、以後山田氏にならない(上部・下部)軸摺金具と呼ぶこととしたい。本稿では(唐居敷とそこに掘り込まれた軸摺穴)について論じているため、上部軸摺金具については言及しない。従つて、以下で「軸摺金具」という場合はすべて下部軸摺金具のことを指す。

(八) 試みに、携行型の蛍光X線分析機器を用いて鞠智城跡唐居敷の軸摺穴に付着した錆色部分の表面の成分分析を行ったところ、組成は錆色の付

着していない部分とほぼ同じであり、鉄分の顕著な付着などは認められなかった。池ノ尾門唐居敷例と合わせて考えれば、軸摺穴に付着した錆色の大半は、軸摺金具の装着痕跡とは評価できない可能性が高い。この点についてはいずれ稿を改めて論じたい。

(九) 宇美口城門からはこれまでに三つの唐居敷あるいはその可能性のある石材が採集されているが、そのうち一例(第3図-5に示したもの)は直径二〇センチ弱の円孔があいているのみで他に加工がなく、唐居敷であるとの確証が得られないため本稿では除外することとする。なお、同様の理由で、大宰府跡出土の一例、播磨城山城跡出土の一例などを検討から除外している。

(一〇) 九州歴史資料館では、過去の発掘調査で土塁中から採取された炭化物の放射性炭素年代測定を平成二五年度に実施した。その結果、北石垣城門の床面積土中から出土した炭化物の年代が、築造当初の積土と考えられるのほか各地点の土塁中出土の炭化物よりもわずかに新しい年代を示すことがわかつている。北側の城門の築造年代が大野城の初築より下ること、ひいては唐居敷における大野城Ⅱ式が大野城Ⅰ式よりも新出することを示すもう一つの証拠となる。詳細は平成二五年度末に刊行予定の報告書に掲載することとしているので(小澤二〇一四予定)、合わせて参照されたい。

参考文献

- 大澤正己・小澤佳憲 二〇〇八 「大野城跡第四六次調査(北石垣地区)C区城門跡出土の鉄製扉軸受金具の理化学的調査」『大宰府史跡発掘調査報告書』五(平成一八・一九年度) 九州歴史資料館
- 小澤佳憲 二〇一二 「朝鮮式山城と神籠石系山城―築城技術の一端からみた分類試案―」 日本考古学協会二〇一二年度福岡大会実行委員会編『日本考古学協会二〇一二年度福岡大会研究発表資料集』

小澤佳憲 二〇一四（予定）「大野城跡第四〇次・四六次・四九次調査出土炭

化物の年代測定―土壘中出土炭化物の年代―」『大宰府史跡発掘調査報告

書Ⅷ―平成二四・二五年度―』九州歴史資料館

小田富士雄 二〇二一「鞠智城の創建を巡る検討」『鞠智城跡Ⅱ―鞠智城跡

第八く三二次調査報告―』熊本県文化財調査報告第二七六集 熊本県教育

委員会

鏡山猛 一九六八『大宰府都城の研究』風間書房

九州歴史資料館 二〇〇二『大宰府政庁跡』

九州歴史資料館 二〇〇九『水城跡』

熊本県教育委員会 一九八三『鞠智城跡』熊本県文化財調査報告第五九集

熊本県教育委員会 二〇一二『鞠智城跡Ⅱ―鞠智城跡第八く三二次調査報告

―』熊本県文化財調査報告第二七六集

甲元眞之 二〇〇六「鞠智城についての一考察」『肥後考古』第一四号 肥

後考古学会

総社市教育委員会 一九九五「鬼城山第一城門跡の発掘調査」『総社市埋蔵

文化財調査年報』五

総社市教育委員会 一九九六「鬼城山第一城門跡の発掘調査」『総社市埋蔵

文化財調査年報』六

総社市教育委員会 一九九七「鬼ノ城 角楼および西門の調査」『総社市埋

蔵文化財調査年報』七

総社市教育委員会 一九九五「鬼ノ城 南門跡ほかの調査」『総社市埋蔵文

化財調査年報』八

総社市教育委員会 二〇〇五『古代山城 鬼ノ城』総社市埋蔵文化財発掘調

査報告一八

総社市教育委員会 二〇〇六『古代山城 鬼ノ城Ⅱ』総社市埋蔵文化財発掘

調査報告一九

ソスンフム・チョ ロクジュ 二〇〇六「忠州山城北門址発掘調査」『湖西

地域文化遺跡発掘調査』

対馬市教育委員会 二〇〇八『古代山城 特別史跡金田城跡Ⅲ―特別史跡金

田城跡保存修理事業に伴う発掘調査報告書概報（南門）―』対馬市埋蔵文

化財調査報告書第五集

東亜考古学会 一九五三『対馬―玄海における絶島、対馬の考古学的調査―』

奈良文化財研究所 一九六〇『川原寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所

学報第九冊

奈良文化財研究所 一九六五「昭和三九年度平城宮発掘調査概報（第一九・

二二次調査）」『奈良国立文化財研究所年報一九六五』

奈良文化財研究所 一九八四「藤原宮西面中門地域の調査（第三七次）」『飛

鳥・藤原宮発掘調査概報一四』

奈良文化財研究所 一九九二「東面大垣西方の調査（第二三・一六次調査）」

『一九九一年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』

福岡県教育委員会 一九九一『特別史跡大野城跡』Ⅶ（太宰府口城門跡発掘

調査概報）

福岡県教育委員会 二〇一〇『特別史跡大野城跡整備事業Ⅴ』福岡県文化財

調査報告書第二二五集

美津島町教育委員会 二〇〇〇『金田城跡』美津島町文化財調査報告書第九

集

美津島町教育委員会 二〇〇三『古代朝鮮式山城 金田城跡Ⅱ』美津島町文

化財調査報告書第十集

向井一雄 一九九九「石製唐居敷の集成と研究」『地域相研究』第二七号

地域相研究会

山田隆文 二〇一一『鉄製の門扉軸摺金具について』『勝部明生先生喜寿記

念論文集』勝部明生先生喜寿記念論文集刊行会

大和郡山市教育委員会 一九七二『平城京羅城門跡発掘調査報告（第一次く

第三次発掘調査）』